



美少女セレブ戦士
プリプリムーン

西東六三

[[[[[[Puboo::BookConverter::Page::Fix::Style::FontFamilyescape1

夜道の住宅街を歩くサラリーマンの男。男の背中のうちひしがれ、弱々しく見えた。今日も仕事でミスをしでかし、さんざん上司にしぼられ、残業してくたくたになって帰るところだった。思えば男の人生は失敗の連続だった。学生のころから人より要領が悪く、勉強が不得意で、誰からも評価されず、いつもばかにされ、いじめられる立場だった。社会人になってからも仕事はできず、出世競争からあつというまに取り残され、同期や後輩に次々と追い越されていく。自己嫌悪を繰り返す毎日だった。

俺なんかもう死んだほがいのだろうか……。

「おい」

物思いにふけていたので、近くに人がいることにまったく気づかず、突然話しかけられて驚いた。

「……は？ 私ですか？」

「金を出せ」ナイフを突きつけられた。

なんてこった……強盗だ！ 俺は能がないだけでなく、ツキもないのか……。

「さっさと出せ」押しつけるように、強盗はさらにナイフを突きだしてくる。

0「あ……ああ、えーと……」Puboo::BookConverter::Page::Fix::Style::

「待ちなさい！」

男がうろたえていると、突然上のほうから少女の声がした。驚いて見ると、セーラー服のようなコスチュームに身をつつんだ十代前半の少女が、民家のブロック塀の上で奇天烈なポーズを決めてつつ立っていた。強盗は慌てて少女のほうにナイフを向けた。

「な、なんだてめえ！」

「月とは無関係に自分の裁量で悪を斬る！ 美少女セレブ戦士プリプリムーンさんちょうっ！ 路上強盗などふてえ話だわ」

「なんだお前は！ 怪我したくなかったらガキは失せろ！」

「そうはいかないわ。あたしは町の平和を無給で守る美少女戦士……」少女はブロック塀の上でぐるりと一回転し、再び奇天烈な決めポーズをとって言った。「プリプリムーン！」

「やかましい！ 消えろっつってんだろこのがき！」

「あたしが守るこの町で路上強盗とはいいい度胸ね。そういう悪は、月とか太陽とかそういうものには一切関係なく、このあたしが、自分の裁量で……斬る！」

再び決めポーズ。

「何言っただお前は……。怪我したくなかったら消えろ！」
「……斬る斬る……斬る！」ブロック塀の上で決めポーズのまま、完全に自己陶醉しきった様子でぶつぶつとつぶやき続けるプリプリムーン。

「全然聞いてねえなこいつ……。くそう、なめんな！」

しびれをきらした強盗は塀の上のプリプリムーンの脚にナイフで切つけた。

「とーうっ！」プリプリムーンは強盗のナイフをひらりとかわし、男と強盗の間に割って入る位置に着地。そして反射的にあとさった強盗に向かって高飛車に言い放った。

「やい、ちんけな路上強盗！」

「ちんけとはなんだこの野郎！」

「このあたしが無給で守るこの町で路上強盗なんかしたのがあんたの間違いよ。おとなしく空き巣とか押し込み強盗とかしてればあたしに退治されずにすんだのに、愚かなことをしたわね」

「な、なに言っただ？ 空き巣や押し込み強盗だって立派な犯罪だろか！」

「犯罪かどうかとか、そんなことどうでもいいの。あたしはひとりで町の平和を守ってるから、町中の路上以外の平和は管轄外なのよ。路上だけで手いっぱいなの。個人の自宅内の平和に関しては各自の自己責任よ」

「お前は分譲マンションの管理人か！」

「問答無用！ いくわよ！」

混乱して呆然となったまま動けない男をよそに、プリプリムーンはさっさと強盗に飛びかかった。

「ムーン＝エクセレント＝ブルーマウンテンコーヒー！」ナイフを持った強盗の手に素早く強烈な蹴り。「いてえええっ」

「ムーン＝ゴージャス＝िकासミパスタ！」ナイフをとり落とし、拾おうと屈んだ強盗の顔面に狙いすました蹴り。

「ぎゃっ！」

「ムーン＝ビューティフル＝アールグレイティー！」口から血を流し、口元をおさえてうずくまる強盗を前蹴りで地面に突き倒す。「うわっ！」

「ムーン＝セレブリティ＝サーロインステーキ！」地面から起き上がろうともがいている強盗の脇腹に無慈悲な爪先蹴り。

「ぐえっ！」

「ムーン＝エレガンス＝ショートケーキ！」地面に突っ伏して嘔吐している強盗の後ろに回り、躊躇なく股間を蹴り上げる。

「おえーっ、おえーっ、おゲッツ！」

「ムーン＝ワンダフル＝クリームパフェ！」意識を失って地面に横たわる強盗の頭にとどめの蹴り。「……」

「……。ムーン＝アメイジング＝シラタマゼンザイ！」何か物足りなかったのか、完全に動かなくなった強盗に無意味な蹴り。「……」

あっというまの惨劇。ぴくぴく痙攣している強盗を満足げにながめたあと、プリプリムーンはサラリーマンの男に向き直った。

「危ないところだったわね。でもお礼なんていらないのよ。私は町の平和を守るため、無給で戦う美少女セレブあつ？！」

決め台詞を言い終える前にプリプリムーンの下腹部に拳がめり込んでいた。腹を押さえてうずくまるプリプリムーンの前に、握り拳を震わせるサラリーマンの男が仁王立ちになっている。

「な、なにをす……」

男の顔面は怒りにゆがみ、爆発寸前といった体でひくついている。

「ふ……ふ……ふざけんなこのやろおおおお——
っ！ 何が……何が美少女だ、何がセレブだ！ 自分でいって恥ずかしくねーのかずうずうしい！ ちょっと可愛いからって調子のりやがってばかやろう、何がプリプリムーンだこのがき！」

「ちょ、ちょっとあんた……助けてもらった恩を仇で返す気？」

「うるさい！ なにがセレブだ！ 働いたこともねーくせに世の中なめてんじゃねーぞ！ だいたいてめーがきのくせしやがってなんだその口のききかたは！ 大人に対する口のききかたもしらねーのかばかたれが！ 親のしつけががなってねえんだふざけやがって、なにがセレブだちきしょう！」

腹の痛みで動けないプリプリムーンにタックルして組み伏せる。

「きゃーっ！」

馬乗りになって往復ビンタの嵐。

「きゃーっ！」

「なんだふざけた服着やがって、こんなもん！」

コスチュームの上着をびりびりと引きちぎりながら引きはがす。

「きゃーっ！ なにするのよーっ」

上半身を隠すのに両手の塞がっているプリプリムーンのスカーツも脱がす。

「きゃーっ！ やめてーっ！」

暴れるプリプリムーンを押さえつけ、有無をいわさずパンツも脱がす。

「きゃーっ！ 変態ーっ！」

「ゼエ、ゼエ……な、何が、プリプリムーンだ、ヒヒ……子供のくせに、いいケツしやがって……ヒヒ、生意気だ……ヒヒヒ……」

「やめてーっ、あたしは中学生よーっ」

「うるさい！ 中学すら卒業してないようながきが、社会にでて働いてる大人に逆らうんじゃない！」

「やめてー！ 子供への人権侵害よっ！ 性的虐待よーっ！」

「ばかやろうユニセフなんか大嫌いだこのやろう！ 社会にでて働いてから一人前の権利主張しろってんだこのやろう！ 俺なんか毎日会社で罵倒されて人権侵害受けまくってるけど食ってくためにしかたなく我慢してるんだばかやろう！」

「やめてー！ あたしはセレブなのよ！ プライドがあるのよーっ。安月給の三下サラリーマンにレイプなんかされたくないのよー！」

「ばかやろうっ、高給取りのエリートサラリーマンだったらレイプなんかするかこのやろう！ あいつらは金もってるから高い金出して愛人かこったり高級ソープ通ったりしてんだ、俺をばかにして散々こき使って搾取した金でなあ！ そういう搾取した金で裕福に暮らしてる家で生まれてきて、のほほんといい暮らししてるお前らセレブのがきから俺が搾取するのは当たり前だーっ！ 返せっ、搾取された俺の労働力！ 返せっ、性的奉仕でっ！」

「やめてーっ！」

「くらえっ、搾取されたおれの悲しみを！ 思い知るがいいっ、社会の厳しさを！」

「あーっ！」

「どうだー！ これが、世の中の厳しさだーっ！」

「あーっ！」

「どうだー！ いい気になりやがってー！」

「あーっ！」

「くっそ～、いいけつしやがってー！」

「あーっ！」

「子供のくせに生意気だー！」

「あーっ！」

「世の中なめてるからこんなけつになるんだー！」

「あーっ！」

「くっそ～いいけつだーっ……ハッ、このけつか！？ このけつで、男たぶらかすのか？！」

「あーっ！」

「このけつに、またばかな金持ちがだまされて結婚していい暮らしするのか？ このけつでまたセレブ暮らしなのか？！」

「あーっ！」

「それでまたばかでいいけつのがき産んでそいつがまたばかな金持ちをいいけつでたぶらかして結婚してばかでいいけつのがき産んで……」

「あーっ！」

「そうやって、延々と続いていくのか！ ばかでいいケツのセレブの搾取が！」

「あーっ！」

「そしてそのばかでいいけつのセレブどもに、おれの子供やその子孫たちも搾取され続けるのかーっ！」

「あーっ！」

「くそー許せんっ！ 許せんぞこのけつーっ！」

「あーっ！」

「そんなに搾取したきゃ俺の精子を搾取させてやるーっ！ どうだーっ、一滴残らず搾取してみろーっ！」

「あーっ！」

プリプリムーンに倒された強盗がようやく起き上がり、惨状を見かねて止めに入った。

「お、おいやめろよ、お前やりすぎだぞ……」

「強盗のくせしていい人ぶってんじゃねーぞごらああああああ！」

転がっていたナイフで強盗の左胸を一突き。

「ぎゃあああああああああああああああああ」

気づくと地面には、自分が強姦した女子中学生と、自分が刺し殺した強盗が倒れていた。

「ひひ、どうだ、ひひひ……敵を、とってやったぞ、俺の……子孫の分まで！」

そして思い出した。そもそも自分には子供も妻もない。

「……全部、全部会社が悪いんだ！ 社会が悪いんだ！ 俺に冷たい世間が悪いんだーっ！」

=== 終わり ===

美少女セレブ戦士プリプリムーン
<http://p.booklog.jp/book/99732>

2016年2月8日 更新 Ver. 1.00

著者：西東六三

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/rokuzos/profile>

感想はこちらのコメントへ
<http://p.booklog.jp/book/99732>

ブックログ本棚へ入れる
<http://booklog.jp/item/3/99732>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ